

滋賀医科大学開学三十周年記念誌

著者	滋賀医科大学開学三十周年記念誌編集委員会
発行年	2004-10-01
その他の言語のタイトル	Shiga University of Medical Science 30th Anniversary
URL	http://hdl.handle.net/10422/4372

第6章

卒業生たちは今



卒業生たちは 今

滋賀医科大学にかける夢 夢 それは医者になること

医学科5期生 木築野百合

大抵の医学生、もうすでに医者になって仕事として医業を行っているもののほとんどは、「お医者さんになる。」ことが子供のころの夢だったのでしょ。わたしも小学校の卒業文集に「医者になりたい。」と書いたことを覚えています。私の小学校時代の友人たちは「のうちゃんは夢をかなえて、お医者さんになったんだね。」とってくれます。ところが、私の夢はまだ、かなっていないのです。(一部しかかなっていないと言う方がいいのかもしれませんが。)前読売巨人軍の原監督が、現役引退のとき、「僕の夢には続きがあります。」という名ぜりふを残したのをご存知ですか。夢の続きの具体的構想はあえて口にしなかったのですが、われわれ巨人ファンは、監督になって、日本一を目指すことを意味していると誰もがわかっていました。ところが、実際監督に就任し、一旦は日本一に輝きながら、リーグ優勝を星野タイガースにはばまれ、監督を辞任せざるを得なかった原前監督の無念を思うと、たかが、野球とすておけない複雑な感情がわきおこってきます。組織と個人の意識の相違と、個人の力が組織のなかでいかに小さいことか、政治力と、制度と、経済機構のなかで、情熱だけでは医業も決して楽な職種ではないことを痛感しながら、一開業医として、原辰徳にとって、今こそ「この夢には続きがある。」といたいのだろうと、人生評論をしながら、ナイターの解説に耳を傾けています。

この原稿を書いているおりしも今、バッファローズとオリックスの合併の話題が報道されています。2リーグ制の廃止論まで出てきて、プロ野球の世界もなかなか複雑です。子供の頃「大きくなったら野球選手になりたい。」といていた野球少年たちが、職業として選ぼうとする、「プロ野球」という組織は夢やあこがれだけでは、語り切れない様相を呈しています。私自身が大学受験を一浪して、予備校生活を過ごしていたころ、江川卓という大投手がプロ入りをするのに当たり、意中の球団に入団できない可能性を知り、自分には大学も学部も自分で選択できる自由があることを認識し、自分の努力が十分で、その大学の合格点にさえ達すれば、意中の大学に入学できる幸せを改めて感じました。江川は、自分がかんばって、すごい投手になったことで、複数の球団から入団を望まれ、意中でない球団に指名される可能性があるということです。努力の結果が自分の希望と反する結果になるのは不幸なことだと同情したものです。しかし実際は、空白の一日などといって、ルールの狭間について、江川は巨人軍入りをし、私は共通一次試験で、自分がかんがれてきた大阪大学に受験するには不十分な得点しかできず、医学部受験をあきらめるか、志望大学をかえるか、二浪するかという状態になってしまいました。予備校で仲良くなった友人が、私に「君は大学にはいることが目的なのか、医者になりたいのか。」と問うてくれました

た。そうでした。私に大学に合格することが最終目標でなく、医者になることが夢だったことを気づかせてくれました。私になりたい医者になるために阪大医学部に入学する必然性はなかったのです。ただ、子供の頃から、父とおなじ阪大に入りたいと口にしてきた自分のせりふを裏切りたくなかっただけでした。大学予備校の進路指導の先生は、滋賀医科大学受験をすすめてくれました。でも志望大学を変えたくないという気持ちも残っていました。滋賀医大なんて聞いたことのない大学に不安がありました。

ある日私は、滋賀医大がどこにあるのか、どんな大学なのか見に行きたくなりました。まだ、受験の下見には早い時期でしたが、神戸から瀬田まで一人で来ました。帝産バスで大学まで来て、付近がとてもしなやかだと感動したのをおぼえています。入試の準備のなされていない、単なるある一日の大学の姿を見たのです。大学病院が開院して間もない頃で、大学の校舎の周りの芝生がまだ植え付ける前の段階でした。この大学は本当に新しいんだ。古い歴史のある大学の長い歴史のページの片隅に名を連ねるのもいいけれど、この大学の歴史を作る側に私はなるのだ。とそんな風に思ったのをおぼえています。まだ、受験もする前から、合格してこの大学の一人になることを心に描いていました。

一開業医といえども昨今の経済状況のなか、多少なりの経営的手法や、患者獲得の戦術は必要な状況、経済や経営に疎いわたしもたまには、経営のノウハウの冊子に目を通したりしてみます。そんななか「イメージすること」の大切さを語った物がありました。合唱コンクールで優勝している自分たちをイメージし、そのために練習をつむ。人は、自分がイメージできないものにはなれないという考え方で、大企業に成長している自分の会社をイメージし、そのために必要なものを準備する。そうすることで、準備や努力が有効に実現にむけたものになっていくのだそうです。私は滋賀医大の臨床講義室に座っている自分をイメージし、二次試験までの日々を送ることができました。イメージはときにデジャブのように感じる時があります。もしくは以前に予知夢を見たんだと思う時があります。大学合格し、臨床講義室に入ったとき、ここの階段教室で講義をうけている自分を知っているぞと思ったものでした。いま、こうして夢を題材に思い出すなかで、あの、デジャブは私の滋賀医科大学に連なりたいという強い思いがイメージを鮮明に自分に描写していた結果見せたものではなからうかと感じます。30周年を迎え、

こういう風に投稿する立場にいて、「歴史を作る側になっている自分」をイメージしたその滋賀医大に入学するという偶然は実は私の人生においては必然だったのかもしれないとさえ思えます。

大学生の時に会った多くの友、お世話になった先生、クラブ活動や学外活動で会った多くの方々、滋賀県に来てから今の私の医者としてのバックボーンとなる知識や、人格を形成するための人的財産は大きく増えてきました。滋賀県に来ることが、私にとっての必然だったのだらうと思います。だからこそ今も滋賀県にいます。

さて、本当の私の夢の話をしりだけします。私は中学生のころから、海外医療がやりたいと思ってきました。テレビでみた、バングラディシュの貧しい家族の映像が、今も目にやきついています。医療後進国へ医者として出向き、人として友として人類の健康を支える仕事を世界規模で（とはいえ、たぶん行った先で行う行為としては世界の広さからするとほんとに小さな行いなのでしょうが、）仕事がしたいと思ってきました。そのために全身を診る医者になりたかったし、処置のできる医者になりたかったのです。だから外科に入局することを選びました。女性が外科医をやることの困難や、病院組織の中での女医の立場の難しさを感じたことは少なからずあります。しかし、私の夢には続きがあるのです。今の一開業医としてのわたしは、その夢にむかい、準備をしているのだと言い聞かせ、強く先の自分をイメージし日々努力することにします。第一外科の前教授小玉先生の奥様が、カンボジアやネパールなどの東南アジアの国での活動をされておられ、私の先の夢を聞いてくださって、「私がパイプを作っておくから」といつてくださいました。ますます、私のここにいる（滋賀医大で、第一外科に入局して医者になっている）意味を感じました。イラクとアメリカの状況や、NGOの外国での活動に対する安全性や、考え方の相違が各方面にあり、実際自分がどの段階で、どこの国で医療活動ができるようになるかそれはイメージしにくいところです。

しかし、滋賀医大が、新設医大として、旧帝大とは違う成長をとげ、そこで教育された我々は、単に医者になるだけでなく、人間として、ユニークな医療の担い手となって、成長したいと思います。

ちいさな戦士たちとともに

看護学科1期生 **本多 綾子**

私は看護学科の一期生として卒業し、3年間滋賀医科大学医学部附属病院で勤務しました。現在は、兵庫県立こども病院のNICUで勤務しています。

大学時代は看護学科の一期生という事もあり、何もかもが試行錯誤の中、無我夢中で過ごしていたような思い出があります。漠然と看護師になりたいと思っていた幼少期から、実際大学に入り、専門的な勉強をし、実習を経る中で自分の描く看護師像はより具体的になっていきました。

もともとこどもが好きであったという事もあり、卒業論文のゼミも小児看護を選択しました。実習や研究をしていく中で、たくさんのこどもと触れ合う事ができ、就職を目の前にした時にも私は迷わず小児看護を選択しました。

滋賀医科大学での3年間は私にとって非常に大きく、現在の看護の基となっています。小児内科の病棟と一言に言っても、血液・腫瘍、神経、循環器、整形、新生児など様々な患者様がおられ、それぞれ治療や看護について非常に勉強になりました。また経過の長い患者様が多く、こどもの生活の場、こどもを取り巻く家族などの環境などの捉え方を学ぶ事ができ、今でも立ち止まり、思い返す事が多くあり、貴重な経験をさせて頂いた場所です。

現在私が勤務している兵庫県立こども病院の周産期センターでは厚生労働省の定める総合周産期母子医療センターの指定を受け、ハイリスク妊婦、出生前診断、胎児治療、新生児医療、発達支援を連携しながら児にとって最善の医療を提供することをめざしています。新生児科での年間の入院は600例以上でハイリスクな超早産児(在胎28週未満)、超低出生体重児(出生体重1,000g未満)は年間50例以上、早産多胎は年間100例以上の入院があり年々増加しています。NICU15床、GCU35床の新生児病棟は、ほぼ毎日入院や退院があり、忙しく勤務しています。

「こどもの専門病院に行きたい」その思いで、こども病院に来て、まず配属されたのがNICUでした。私が思い描いていたこども病院での仕事はこども達と話をしたり遊びを取り入れたり、もっとこどもとの触れ合いがたくさんあるものでした。しかし、NICUではたくさんのモニター、保育器、呼吸器、点滴……。処置により児の酸素飽和度や血圧低下をき

たす事も多く、minimal handlingを心がけなければなりません。そして昼夜を問わず入院してくるベビー。緊急オペ出し、急を要する処置……。何もかもが緊張の連続で、何も出来ない自分が情けないと何度も思いました。しかし、つらい事も何度もありましたが辞めずにここまでやって来ることができたのも、親切に指導して下さる先輩方や先生、同期の看護師達のおかげでした。最近では、まだまだ未熟ながらも、保育器の中のこどもを素直に「かわいい」と思える余裕が出てきました。

NICUに入院をしなくてはならない状態の赤ちゃんの家族は、こどもが死ぬかもしれないという恐怖心、早産してしまったという罪悪感や不全感、こどもを直接抱けない中で、親役割を課せられるプレッシャーなど様々な心理状態にあります。NICUの看護師の仕事には、児のケアだけでなく、ファミリーケアも重要な部分を占めています。自分に自信のないうちは、重症な児のベットサイドで涙を流す家族に、一体自分には何ができるのかわからず、ただ見守るだけしか出来ませんでした。次第に少しずつ声をかけられるようになり、家族の意向に沿ったケアへとつなげていく事が出来るようになり、これから始まる家族の最初の場面に私たちが立ち会う事が出来る喜びへとつながってきました。

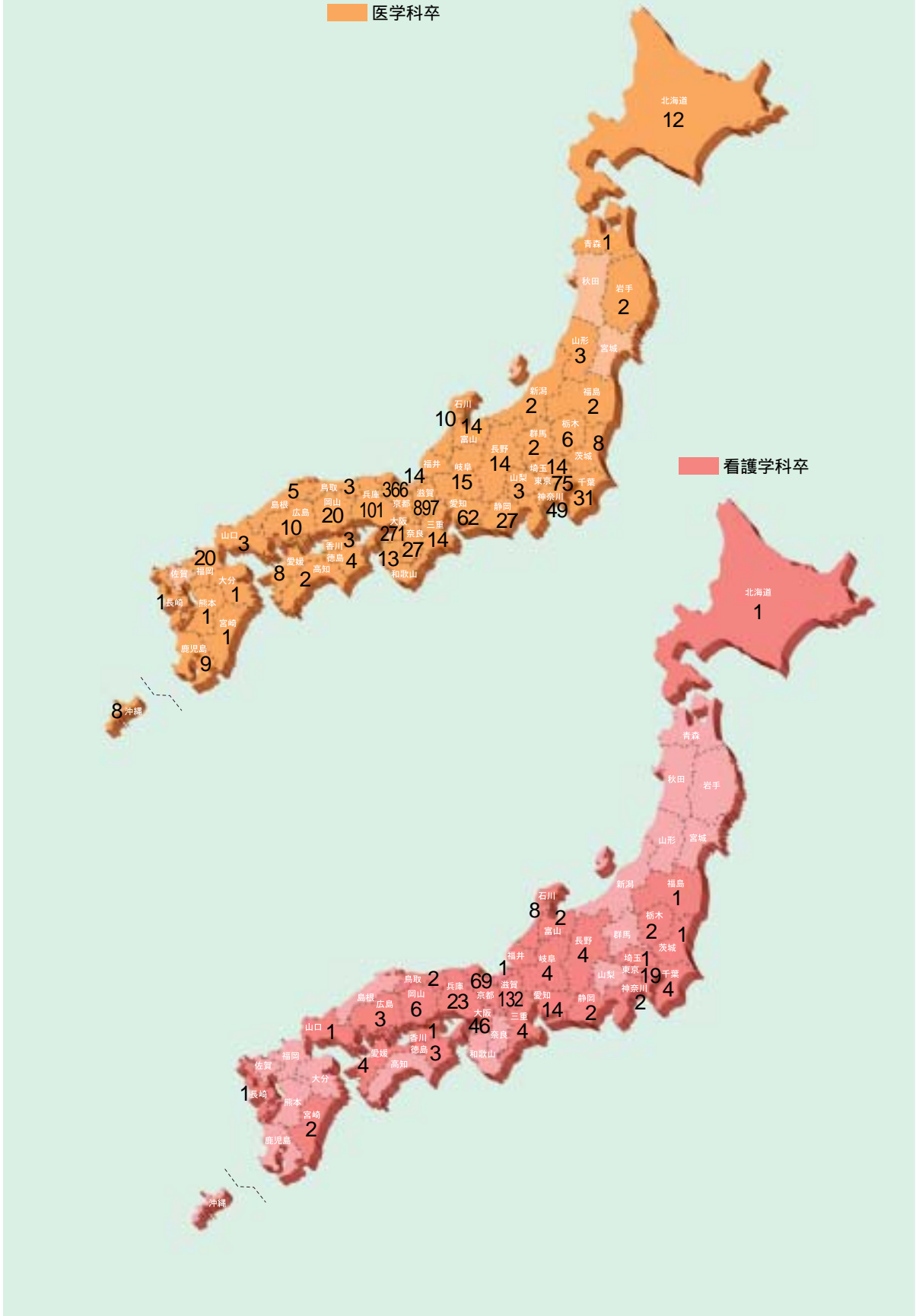
私は今年度から月に3日育児内科の診察介助の為に外来へ降りる機会ができました。小さく生まれたこども達の退院後の成長の様子、家族が家族として成長していている姿など、感動することや、改めて勉強になることが多くあります。それと同時に力強く成長している児や、一生懸命育児している家族を見ていると、現在のNICUでの医療の意味をも考えさせられる事もあり、日々患者家族から刺激を受けている毎日です。

看護師、医師になるための勉強も非常に重要でしたが、実際働き始めてからも、まだまだわからない事ばかりで、勉強不足を感じている日々です。医療は日々進歩しており、こどもを取り巻く環境も変化していく中で、もっと知識を深め、児にとって最善の治療・看護を行えるようこれからも努力して行こうと思います。

● 卒業生たちの進路データ ●

(平成16年 7月15日現在 同窓会「湖医会」会員資料より)

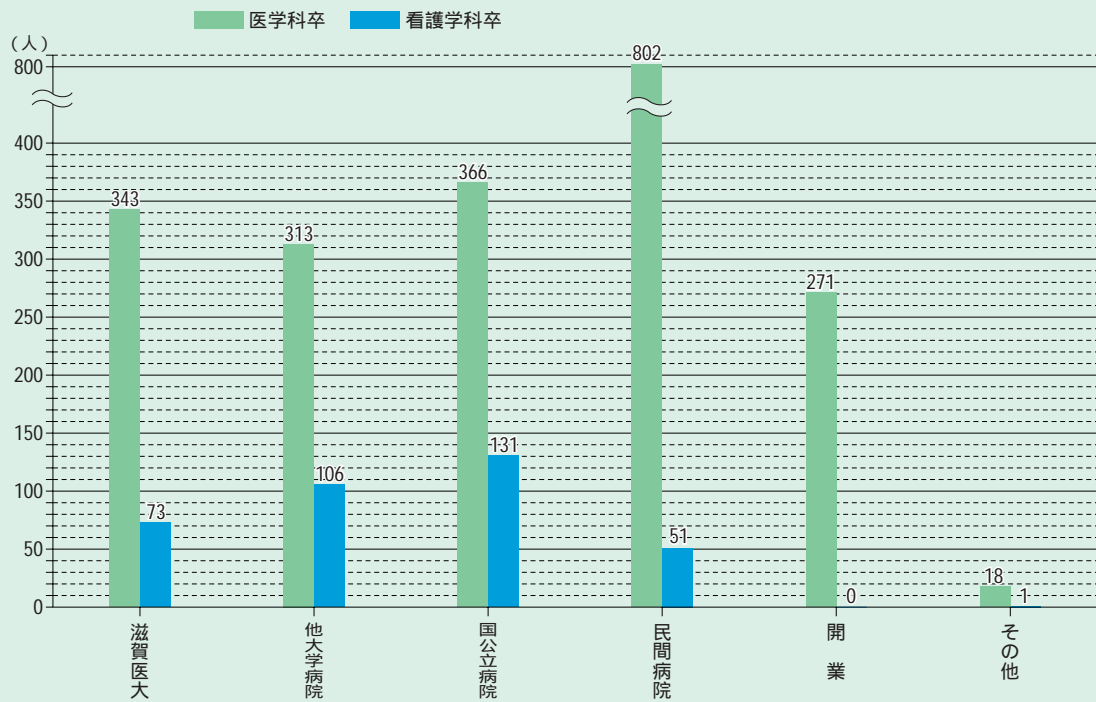
県別学科別統計



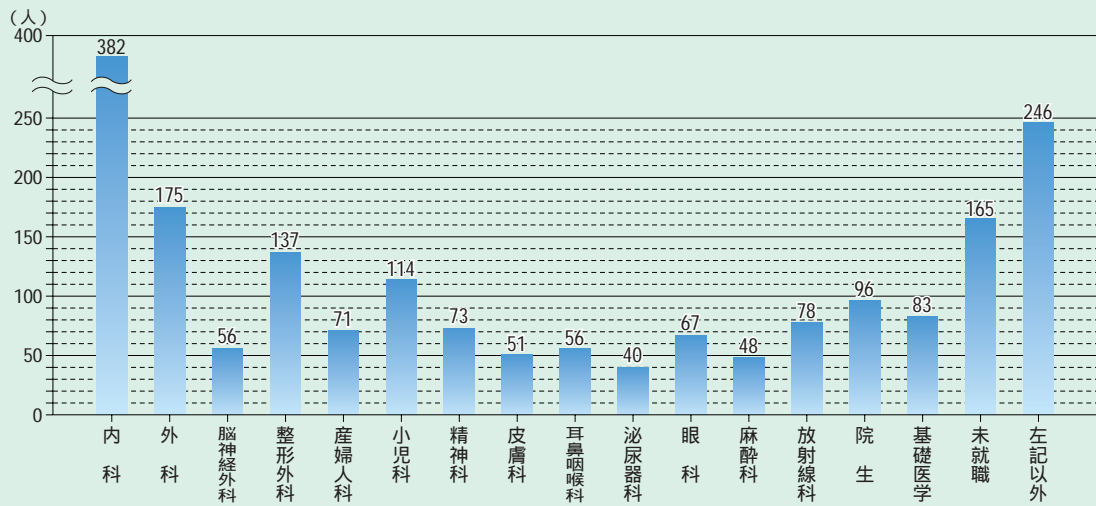
● 卒業生たちの進路データ ●

(平成16年7月15日現在 同窓会「湖医会」会員資料より)

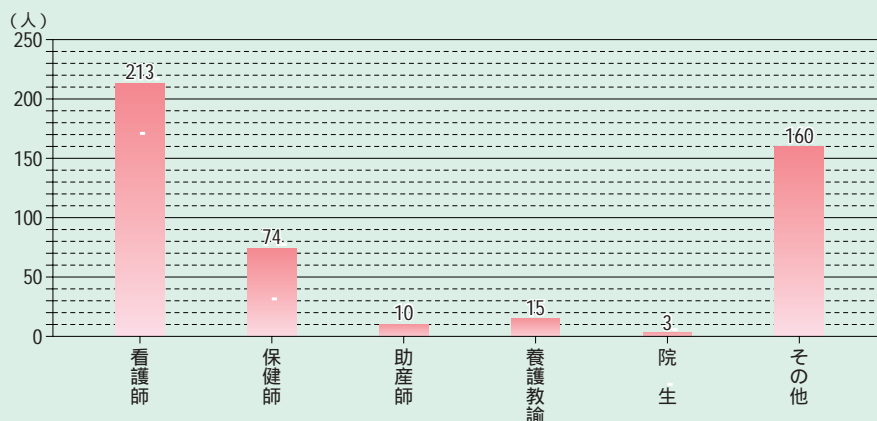
勤務先別学科別統計



医学科専門科別統計



看護学科職種別統計



● 卒業生たちの進路データ ●

(平成16年7月15日現在 同窓会「湖医会」会員資料より)

卒業年度別統計

